丹波篠山の黒大豆栽培 ~ムラが支える優良種子と家族農業~

丹波篠山の灰小屋

化学肥料がなかった時代、農家は泥レンガや漆喰を使って小屋を作り、そこ で枯れ枝や藁、草などを焼いて作った灰や焼き土を肥料にしました。焼き土は、 土と藁や枯れ枝を交互に重ねて焼いたもので、黒大豆栽培にも使われたそうで す。この小屋を「灰小屋」あるいは「灰屋」といい、古いものは江戸時代にまで遡 るといいます。かつては日本全国にあったそうですが、今ではほとんど見られ なくなりました。しかし、丹波篠山には240カ所以上もの灰小屋が残されてい ます。半数は保存状態が良く、今はさまざまな用途で活用されており、農村景 観を形作る貴重な建造物として評価されています。

「昔は枯れ枝を灰小屋で焼いて、灰を採って作物にやっていた」と、**山**裾の灰 小屋の持ち主がかつての農業の様子を話してくれました。昭和の中頃まで耕運 機などの農業機械はなく、農家は牛を飼い、牛を使って田畑を耕しました。現 代のような肥料もなく、牛小屋にしいた藁を堆肥にして田畑に鋤きこみました。 そして、山の枯れ枝を拾い集め、山裾の草を鎌で刈り、灰小屋で焼いて灰肥料 を作りました。枯れ枝を背負って灰小屋に運ぶだけでも重労働だったそうです が、捨てるものや無駄になるものは一つもなかったといいます。

地球温暖化対策など、世界の国々が環境問題に取り組む中、日本でも環境に 負担をかけない農業が求められるようになりました。灰小屋は、地域の資源を 無駄なく使った時代の農業を思い起こさせてくれます。灰小屋を巡りながら、 地域の環境のために私たちに何ができるのか、考えてみてはいかがでしょうか。 vol.09

Ш

の

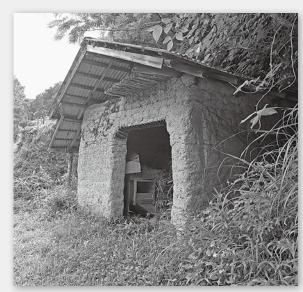
3

0

0

年

の



山裾の灰屋(丸山)

山の緑と相まって農村景観を引き立てる灰屋。 泥レンガを積み重ねて作られています。 今は農業資材の物置として使われています。



2連式の灰屋(大野)

灰肥料を保管する土屋(左側)を備えた灰屋。 2連式の灰屋は少なく、全体の14%程度です。 3連式の灰屋も1カ所だけ見つかっています。